

けれども、その精神的に豊かな生き方は、何もチベットの遊牧民に限られたことではないだろう。今回、大震災の被害を受けたこの列島に暮らしてきた私たちの生活にも、かつては、人も自然の一部であるとの認識が息づいていて、身近な自然を鏡として自分たちの心のありようを見つめる生活があったはずだ。

不便な避難生活を強いられている方々には、くれぐれも誤解なきようお断りしたうえで言うのだが、巨きな大自然のもとでの私たちの暮らしは、もともとその軒先に一時的に身を寄せている、言わば「仮住まい」のようなものではなかったのか。

### 私たち自身の不明を恥じる

多くの人が指摘しているように、急速に成長した戦後の日本の社会は、その膨張に伴い莫大なエネルギーを必要とした。その背後には留まるところを知らない人々の欲望があった。

私の記憶をたどれば、40年ほど前のこと、産業社会から取り残されたような地域に原子力発電所立地の甘い誘いがもたらされた。その後、様々な経緯はあったが、結果として住民は危険を承知し、この誘いに乗り豊かな地域発展の夢を見たと言えるのではないか。地域の雇用も増え、いつの間にか街はきれいに整備され、新築の家も建つようになった。しかし、まだしもよかったのである、ここまでは。

それからの夢の続きには際限がなかった。見えない危険に対してのわかりやすい見返りとして建設された「公共」施設は、どれも地域には不釣り合いな豪華さだった。そして、それらピカピカの「箱モノ」の代償がこの放射能汚染であり、わが街を死の街にすることだったのである。

これは原発を受け容れた地域の人たちの安易さを指弾しているのではない。私たちの誰もが、そのような欲望構造に取り込まれていた。曇った眼差ししか持たず、この構造をキ

ツチリ見抜けなかった私たち自身の不明への率直な慚愧の思いであると理解願いたい。

発電所が目と鼻の先にありながら、今、私の町には基本的に電気はない。水道も断水状態が続いており、いわゆるライフラインはブツブツ切断されたままだ。生活物資の流通もままならず、とりわけ、灯油とガソリンが底をついている。地震の発生以来、ほぼ3週間を経過し、この事態は徐々に回復しつつあるが、冒頭に述べた如く放射性物質漏出の不安に復興の意欲をくじかれかねない状況にある。

市内で亡くなった子どもたちは、幼稚園児1名、小学生8名、中学生9名。これだけでも18名の将来ある命が奪われた。なお幾人かの不明者がいる。すべての学校は避難所となっており、授業再開はおろか入学式の見通しすら立っていない。これが甘い夢の行き着いた現実なのである。

### 世界を「感じる」ことの大切さ

かつてモンゴルの大草原を旅していた時のこと、一人の遊牧民が草原の彼方を指さし、「今、馬に乗って私の家族がこちらに向かってきている」と言った。私は彼が指さした方角を凝視したが、そこには馬の姿などは見当たらず、うねうねと続く草原が、強い日射により、揺れて見えるのみだった。

「ほら、あそこに…」また彼が言うので、今度はカメラの望遠レンズを越しに覗いてみたが、同じだった。

だが、しばらくすると、たしかに馬に乗って人はやってきた。私には見えなかったものが、彼には視えていた。

彼らは、あるいは、その人はたまたま恐ろしく眼のいい人だったのだろうか。いいや、そうではあるまい。彼の視力が私より勝っていたのは事実だろう。だが、その言わばレンズの「性能」というレベルの問題以前に、外界の事物を「看取る力」とでもいうような、感覚器官から情報を引き出す力に差があったのではないかと私は考えた。